

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクト I (教員自由企画型) 2016 年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名	
	スポーツウエルネス学科	安藤佳代子	印
研究課題名	スポーツ・フォー・エブリワンの実現に向けて ーゆるスポーツの体験から誰もが楽しめるスポーツの考え方を学ぶー		
研究期間	2016 年度		
研究経費	100 千円		

【研究の概要】

運動が苦手な人は進んでスポーツすることを選択しない。それは子どもから大人、勿論大学生も同じ認識になっていると考えられる。そんなスポーツ嫌いの認識を変えることができるのが「ゆるスポーツ」である。このプロジェクトは、コミュニティ福祉学部の学生を対象とした「ゆるスポーツ体験会」を実施して、スポーツの楽しさを感じてもらえ、誰もが楽しめるスポーツのあり方や考え方を体験して学べる機会することを目的とした。

「ゆるスポーツ」とは、年齢や性別、障害の有無にかかわらず、誰もが楽しめるスポーツがコンセプトで世界ゆるスポーツ協会が開発したスポーツのことであり、ハンドソープを付けた手でハンドボールを行う「ハンドソープボール」や、イモムシに扮して転げ回る「イモムシラグビー」など、様々な「ゆるスポーツ」が実際に行われている。日経トレンディネット (2016 年 03 月 10 日) によると「ゆるスポーツ」は従来スポーツに興味の薄かった人も参加できるスポーツのため、企業や自治体からも注目が集まっているとある。また、コカ・コーラ社が中心となり、日本オリンピック委員会、東京オリンピック・パラリンピック競技会が全国で展開する「オリンピックムーブス」の第一弾 (福島県) でも「ゆるスポーツ」が中学生を対象に行われており、教育現場においてもスポーツの楽しさを知ってもらえるツールとして活用できると考えられる。さらには、高齢者を対象としたスポーツも開発されており、実際に介護老人保健施設において実施されており、今後の高齢化社会に向けて非常に重要な視点であると考えられる。昨年度、私が担当したアダプテッドスポーツ論において、世界ゆるスポーツ協会代表の澤田氏をゲストスピーカーとしてお呼びしお話を伺ったところ、受講学生からの反響は大きく、スポーツに対する認識の変化が得られたこと、また実際にやってみようという声が多かったことからこのプロジェクトを計画した。

ゆるスポーツ体験会の種目は「ベビーバスケットボール」の 1 種目を 2016 年 12 月 21 日に行った。11 時から 3 回に分けて実施し、総参加人数は 80 名であった。ベビーバスケットボールとは、激しく動かすと大声で泣き出してしまふ特殊なボールを使ったバスケットボールで、泣かせないようにそっとパスをしてそっとキャッチしなくてはならず、勿論ドリブルない、プレーヤーの母性が試されるスポーツ。講師は、ベビーバスケットボールを開発された、面白法人カヤック 八木原泰斗様、松田壮様にお越しいただき、体験を行うのみならずベビーバスケットボールの開発に至るまでの工夫や、アイデアの出し方など幅広く指導を行っていただいた。学生に実際に新しいスポーツを考えてもらうことも行ってほしい、視野の広さと柔軟な思考力が求められることが分かり、学生にとって非常に良い経験となった。

現在、日本において運動実施率の低下、子供の体力低下、高齢化社会が迫りさらに医療費が増加することが懸念されており、その対応策として全体の運動実施率を上げることが検討されている。また、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、国民の運動の機会を増やしていく「スポーツ・フォー・エブリワンの実現」には、アダプテッドスポーツの考え方は重要であり、実際に「ゆるスポーツ」として子供から高齢者まで行われている内容を経験することは、学生にとって経験値を広げ、卒業後に生きる内容となることが期待できた。

また、上記にも述べたが「ゆるスポーツ」は、企業、自治体、高齢者、障がい者、教育の部分においても活動できるツールであることから、スポーツウエルネス学科のみならずコミュニティ福祉学部の全ての学科学生においても視野の拡大につながり参考になる体験会になることが考えられた。さらには、運動嫌いの学生においても、運動 (スポーツ) の認識の変化についても得られる機会となると考えられ、コミュニティ福祉学部の学生における運動実施率の向上につながる可能性も示唆された。